

Title	スポーツ集団の現況と将来
Sub Title	The current situation and future of sports organizations
Author	辰沼, 広吉(Tatsunuma, Hirokichi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1972
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.11, No.1 (1972. 2) ,p.19- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	浅野均一教授定年退職記念特集号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00110001-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スポーツ集団の現況と将来

辰 沼 広 吉*

1. いとぐち
2. スポーツ集団の現状
3. 考 察
4. 結 語

1. い と ぐ ち

歴史的には19世紀の貴族階級のスポーツが今世紀に至り大都市を中心に活発なスポーツ活動はめざましく、特に日本においては人間主体性への認識が深まり大衆スポーツの隆盛をみるようになった。

この事実は大衆スポーツの主な要因ではあるが、そのあり方は従来のスポーツとは多少性格が異なる。しかしこの大衆スポーツが現在は異質のものとして批評されているが、将来このもののあり方を異質なものとしてのみ考え放置することは出来ない。またそれが今日の量的増大に対してその力を高く評価する人もある。もともと大衆から優秀な少数分子の発見も可能であろうが、社会の推移という視点から現代スポーツのあり方をとらえる場合、そこに未来への開かれた展望をよみとるか、あるいはそこにスポーツの墮落を見出すかという現代のとらえ方の差異から生じるのである。

そこでこれらの現実を慶應義塾大学における様相の解析を試み、社会一般のそれとの比較検討をする。

2. スポーツ集団の現状

明治初期から柔剣道を始め外来スポーツとして野球、端艇等の愛好者からなるスポーツの自発集団がみられている。慶應義塾においても明治25年にこれらの集団は体育会として組織された。もちろんその後社会的背景により幾多の迂余曲折はあったにしても延々と今日に及んでいる。

* 慶應義塾大学体育研究所長・教授

スポーツ集団の現況と将来

資料の関係上最近10年間の体育会ならびにその他のスポーツ集団の推移を観察しよう(表1, 表2, 表3)。

表1 体育会部員数

部 名	年 度 (全学生数)		45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
	24,426	24,661	24,621	24,097	23,779	23,537	22,730	22,533	21,918	20,839		
柔道部			46	53	58	70	71	85	96	114	127	132
剣道部			74	84	114	104	80	90	85	80	98	101
弓術部			41	80	82	88	72	71	67	70	91	77
端艇部			68	73	66	96	74	85	87	112	93	102
水泳部			40	48	57	56	57	53	48	72	50	65
野球部			61	63	69	70	77	105	110	123	127	113
蹴球部			73	71	72	67	55	53	49	55	72	67
庭球部			67	58	59	67	81	81	101	103	109	100
器械体操部			12	13	13	20	18	17	25	31	28	35
競走部			65	69	70	69	60	57	55	68	76	77
馬術部			34	34	26	28	33	23	28	37	40	61
ホッケー部			23	27	26	26	25	26	26	33	36	38
相撲部			7	8	11	13	16	18	14	18	13	15
山岳部			10	13	21	19	16	19	39	30	38	42
ソッカート部			59	62	65	58	50	43	41	48	49	45
バスケットボール部			46	27	35	30	30	32	44	47	53	57
バスケット部			52	43	48	42	43	37	59	56	59	59
スキー部			24	26	24	19	17	14	19	25	26	26
空手部			46	57	71	59	43	66	58	69	88	90
卓球部			40	34	41	44	50	39	48	43	59	75
ヨット部			41	44	39	51	45	36	39	46	53	71
射撃部			15	17	22	23	20	26	36	30	53	62
バレーボール部			18	20	27	20	23	22	26	30	26	34
レスリング部			30	28	26	25	22	26	27	24	32	28
ボクシング部			21	18	19	17	19	23	33	27	33	48
アメリカン・フットボール部			35	42	46	49	48	46	48	53	60	61
ハンドボール部			13	12	17	12	16	19	18	31	27	31
フエンシング部			25	28	34	31	23	14	14	18	28	30
軟式庭球部			50	42	59	54	51	33	54	62	85	97
バドミントン部			39	28	32	34	31	14	24	33	48	50
自動車部			29	27	33	40	48	63	75	82	105	89
軟式野球部			19	21	27	30	23	20	27	28	42	32
重量挙げ部			23	20	30	33	37	45	44	58	65	55
航空部			30	35								
ゴルフ部			76									
部員合計			1,402	1,325	1,439	1,464	1,374	1,401	1,594	1,756	1,971	2,065

スポーツ集団の現況と将来

慶應義塾大学における記録上体育会はよく記載されているが、一般スポーツ団体はそれ自身いく多の変遷があるので記録を充分にとることは出来なかった。従って両者を過去10年間に就いて比較検討することは困難なため、昭和45年度分についてのみ比較すれば、歴史と伝統をもつ体育会部員は1,402名で、全学生数に対する比較は5.7%であり、一般スポーツ団体のそれは(医学部、工学部も含めて)6,783名で、27.8%に達する。もちろんその数と比率だけでは比較は出来ないが、この場合その質的内容について比較検討する必要がある。

表2 その他のスポーツ団体

団 体 名	種 目	年 度										
		45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	
アメリカンフットボール同好会	アメリカンフットボール	35	39									
ダックウォークス	アメリカンフットボール								20			
エバグリーンズゴルフクラブ	ゴルフ (K・E・G)	78	96	103		80		48	60	31		
バーディークラブ	ゴルフ (K・B・C)	132	163	151		140	166	146	125	100	71	
バンカーズゴルフ同好会	ゴルフ (K・B・G・C)	75	67									
パーマーズゴルフクラブ	ゴルフ (パーマーズ)	70										
イーグルゴルフクラブ	ゴルフ					25						
サイクル部	K・C・I・C	40	46	59		51	47		35	30	34	
アンテロプスサッカーズクラブ	サッカー (A・F・C)	60	52	20								
慶應キッカーズ	サッカー	100	117	105		66	44		52	58	70	
桐友会	サッカー								26		25	
アルペンクラブ	山岳 (K・U・A・C)	25	28	26		25	30	39	39	46	54	
アルペンフェライン	山岳 (K・A・V)	16	18	22		20	14	12	16		18	
岳朋会	山岳 (K・G・C)	25	27	22		16	14	23	23	23	10	
慶應クライマーズクラブ	山岳 (K・C・C)	7							13	11	20	
三嶺会	山岳 (K ₃)	20	14	15		19	19		40	46	42	
ワンダーフォーゲル	山岳	134	140				150	296	190		372	
ユースホステルクラブ	山岳	130	200					153		190	110	
K・C山の会	山岳	63										
ハイキングクラブ	山岳 (K・H・C)	114	104	100		93	86	82	87			
慶應ラスカルズカークラブ	自動車 (K・R・C・C)	27	40	33								
ローヤル自動車同好会	自動車		15									
自動車旅行会	自動車					27						
自動車研究会	自動車	63	50	53		39	30					
オートリングクラブ	自動車						28					
水泳同好会	水泳 (K・S・A)	41	33									
水上スキー	モーターボート	15										43
モーターボートクラブ	(K・W・S・C)											
クルージングクラブ	ヨット (K・C・C)	55	50			68	46	34	47	54	32	
慶應義塾逗葉ヨットクラブ	ヨット (K・Z・S・C)	75	66	75		89	68	71	77			
アルバドスヨットクラブ	ヨット (A・L・B・A)	25										
デイモンズクラブ	スキー	36	43	56			43	55		41	67	
エルモスキークラブ	スキー (E・S・C)	112	104	113		100	81	82	86		47	
ゴブリンズスキークラブ	スキー	52	45	53		55	51					
慶應義塾スキー愛好会	スキー (K・S・A)	96	100	90		80	83	81	70			

(次ページへつづく)

スポーツ集団の現況と将来

団 体 名	種 目	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
リーベンスキークラブ	スキー (L・S・C)	25	30	31		37			40	60	35
ショカールスキークラブ	スキー (C・S・C)	67	75	85							
リーゼンススキークラブ	スキー (K・R・S)	40	26								
スキークラブ	スキー (K・M・L・C)								10		
グリーンスキークラブ	スキー										25
スポーツ愛好会	各種目	350	350	350		395		376	498	433	415
卓球部	卓球 (S・L・C)	66									
卓球同好会	卓球(K・T・T・A)	60	54								
アメリカンローンテニスクラブ	庭球一硬 (A・L・T)	75	65	48						9	
アレックステニスアソシエーション	〃 (K・A・T・A)	117	105	114							
ウインザーテニスクラブ	〃 (K・W・T・C)	99	93								
エーデルロイテテニスクラブ	〃 (E・L・T・C)	120	106	80							
エールテニスクラブ	〃 (エールテニス)	77	84	63							
杏葉テニスクラブ	〃 (杏葉テニス)	85	80								
慶球会硬式庭球部	〃 (慶球会)	50	50	51							
慶應九球テニスクラブ	〃 (K・K・T・C)	161	140	140		147	120	127		100	85
サニーテニスクラブ	〃 (K・S・T・C)	121	121	111		100	75		40		
シルバーキャノンテニスクラブ	〃 (S・C・B)	125	131			146	142	84	100	100	
スポーツ愛好会硬式庭球部	〃 (S・L・C)	144									
ソフィアテニスクラブ	〃	50	57	35							
テニスラバースアソシエーション	〃 (T・L・A)	104	104	124		120	100	70	80		35
バロニーテニスクラブ	〃 (B・T・C)	90	95	101		63	28				
フェニックステニスクラブ	〃 (フェニックス)	62	82								
ポニーテニスクラブ	〃 (ポニー)	118	113	112		125	118	122	107	80	16
ヤングテニスアソシエーション	〃 (Y・T・A)	71	55	31							
ラウンドリーテニスクラブ	〃 (K・R・T・C)	64	68	83							
ラリーテニスクラブ	〃	123	120	114			85				
レギュレーションテニスクラブ	〃 (R・T・C)	66	57	43		37		20	30		
ローレルテニスクラブ	〃 (L・T・C)	102	102	95		97	91		39		
庭球同好会	庭球一軟 (K・T・U)									20	
コダマテニスクラブ	〃								100		
スポーツ愛好会軟式庭球部	〃 (S・L・C)	60									
白球会	〃	104	100	90		90	93	83	21		
ロイヤルテニスクラブ	〃 (R・T・C)	78	65								
ビーバーテニスクラブ	〃	13									
馬術愛好会	馬術 (K・R・C)	59	43	57							
K I Cバスケットボール同好会	バスケットボール	41	37	35		26		42	21		30
慶應バスケットボール同好会	〃 (K・G・B・C)	13									
楽籠クラブ (K・R・C)	〃 (K・R・C)	45		58		105	70	48		48	48
慶應バードフェローズ	バドミントン(K・B・F)	25									
バレーボール同好会	バレーボール(K・V・C)	48	46	50		52	35	43	42		37
日吉ハンドボール同好会	ハンドボール(Gets)	22	31	25							
ホワイトベアー	アイスホッケー (K・W・B)	12	13	12			13	15		21	21
K・M・Cアイスホッケー同好会	〃 (K・M・C)	14	17						15	19	
レンジャーズクラブ	アイスホッケー	19	21	22							

(次ページへつづく)

スポーツ集団の現況と将来

団 体 名	種 目	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
ボブスレークラブ	ボブスレー (K・B・C)	21	17								
小林寺拳法会	拳法	35	36	46		70	69	61	40		52
合気道会	合気道	37		73			67	97	76	115	117
居合道同好会	居合道	40	42	44							
剣友会	剣道	60	43								
日本拳法部	日本拳法 (日拳)	18	18	22		16	15	25	25	32	28
ボディービルクラブ	ボディービル (K・B・C)	51	55	90		95	144	154	100		59
丘の上硬式野球部	野球—硬 (丘の上)	20	20	25			27	27		46	40
ケーニッヒ "	" " (ケーニッヒ)	17	15	18			20	13		20	20
パトリック "	" " (パトリック)	21	25	30			20	26		23	40
硬式野球部	" " (K・L・B)	25	20	49							
硬式野球	" " (エマノン)			15			18	21		15	15
グリーンバーク野球クラブ	野球—軟 (グリーンバーク)	25	23	25		28					40
軟式野球同好会	" " (ケインズ)	16	15	15					37	26	30
軟式野球同好会	" " (シャークス)	20	25						25		26
軟式野球同好会	" " (ダンディ)	21	28				32		25		18
フラミンゴ軟式野球同好会	" " (フラミンゴ)	28	30	33			21				
軟式野球同好会	" " (ブリガンズ)	30	33	30						28	27
ブルーズアンドレッド	" " (B&R)	23	11								
軟式野球同好会	" " (ブルーバース)	38	41	45			33		32	33	33
軟式野球愛好会	" " (ミッキーズ)	23				33	38	37			
慶應ユニコング軟式野球同好会	" " (ユニコング)	31	33	23		42		33	40		25
軟式野球同好会	" " (ロビンス)						25			27	
アタッククラブ	" " (アタックス)								28		
パイレーツクラブ	" " (パイレーツ)			22					38	38	33
レバークラブ	" " (レバーツ)	21	33	25		45		40	45	51	36
サンターズクラブ	" " (サンターズ)									25	16
軟式野球同好会	" " (スタップス)	28	22	23		27		20		28	
軟式野球同好会	" " (ブッザーズ)		25								
軟式野球同好会	" " (エトワール)	30	19								
軟式野球愛好会	" "		30		28						
軟式野球同好会	" " (パロット)					16					
軟式野球	" " (K・B・C・L)									210	40
軟式野球	" " (シッターズ)										20
J・S・K・Sラグビークラブ	ラグビー (J・S・K・S)	40	39	42			42	46		60	70
B・Y・Bラグビークラブ	ラグビー (B・Y・B)	31	35	35			37	40		45	52
陸上同好会	陸上競技	19	30								
スキндаイバーズ		16						9	9		
水上スキークラブ	水上スキー (K・W・S・C)	19	22	36		30	25	37		51	
ボーリングクラブ	ボーリング	60	34	41		60	53	50		45	
柔道同好会	柔道 (K・J・D)	110	61	66							
クリケット同好会	クリケット		24								
121 団体	45年合計	5,880人									

スポーツ集団の現況と将来

表3 医学部・工学部スポーツ団体

種目名		年度									
		45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
医 学 部	1 バスケットボール	15	16	20	17	28	27				
	2 バレーボール	19	17	18	12	20	21	26			
	3 馬術	12	9	13	11	14	16	16			
	4 柔道	11	13	13	13	14	11	25			
	5 空手	21	20	20	15	17	11				
	6 弓道	18	17	13	17	8	9	21			
	7 競走	14	12	12	11	10	14	17			
	8 剣道	21	16	15	23	12	8				
	9 サッカー	19	17	12	9	13	13	27			
	10 山岳	11	11	11	8	8	9	17			
	11 スキー	27	26	15	13	5	5				
	12 アイススケート	14	16	7	6	4	9	24			
	13 水泳	31	25	32	19	20	17	22			
	14 卓球	20	15	27	27	25	24	30			
	15 軟式庭球	49	42	34	30	21	32	59			
	16 硬式庭球	45	65	50	47	42	42	57			
	17 端艇	21	16	21	29	20	30	33			
	18 野球(硬式)	23	21	19	22	20	22				
	19 ゴルフ同好会	27	15	19	12	17	14				
	20 軟式野球							29			
部員合計		418	389	371	341	318	334	403			
工 学 部	1 合気道会	15	17	21	21	15					
	2 バスケットボール	13	22	25	23	16		20			48
	3 バレーボール	18	16	18	21	30	30	25			
	4 ゴルフ	38	39	39	35	30	30				30
	5 柔道	20	25	20	21		40	40			30
	6 剣道	33	25	26	20						
	7 ラグビーフットボール	26	27	25	25	29		35			58
	8 サッカー	49	30	30	26	20	25	28			38
	9 山岳	14	13	17	21	17	18	20			22
	10 スキー	20	9	21	32	16	15	32			
	11 水泳	20	19	20	30	46	50	35			
	12 卓球	30	40	30	30	25	20	35			39
	13 軟式庭球	57	51	35	48	42	50				50
	14 硬式庭球	60	70	100	80	100	100				70
	15 端艇	20	14	21	18	28	23	18			30
	16 野球(硬式)	12	15	25	26	20	27	22			27
	17 軟式野球	15	26	22	38	39	38	30			
	18 ヨット	25	20	21	20						
	19 重量拳		20	20	21	12	11				
	20 空手		19	15	110						28
	21 小林寺拳法		15	73	16	14					
部員合計		485	532	624	673	499	477	340			470

表 4 日本体育協会加盟団体

団 体 名	体協加盟日	創立年月日	国際連盟 再 加入
日本陸上競技連盟	大14. 3. 23	大14. 2. 2	1950. 8. 23
日本水泳連盟	"	" 13. 10. 31	1949. 6. 15
日本蹴球協会	大14. 3. 24	" 10. 9. 10	1950. 9. 23
財団法人全日本スキー連盟	"	" 14. 2. 15	1951. 5. 27
日本庭球協会	"	" 11. 3. 11	1950. 7. 12
日本漕艇協会	"	" 9. 6. 1	1951. 8. 22
日本ホッケー協会	"	" 12. 2. 18	1950. 11. 3
日本アマチュアボクシング連盟	昭 2. 5. 24	" 14. 7. 10	1950. 10. 31
日本バレーボール協会	" 2. 10. 29	昭 2. 7. 21	1951. 9. 18
日本体操協会	" 5. 10. 1	" 5. 4. 12	1950. 8. 18
日本バスケットボール協会	" 5. 12. 2	" 5. 9. 20	1950. 8. 25
日本スケート連盟	" 6. 4. 10	" 6. 4. 10	1950. 8. 18
日本アマチュアレスリング協会	" 10. 5. 20	" 6. 4. 18	1949. 7. 2
日本ヨット協会	"	" 7. 10. 11	1951. 11. 8
日本ウエイトリフティング協会	" 13. 5. 31	" 11. 5. 31	1950. 10.
日本ゴルフ協会	"	大13. 10. 17	
日本ハンドボール協会	"	昭13. 2. 2	1950. 9.
日本アマチュア自転車競技連盟	"	" 9. 12. 12	1949. 7. 2
日本軟式庭球連盟	" 3. 4. 7	" 3. 5.	1949. 7. 2
日本卓球協会	" 21. 9. 5	" 6. 7. 15	1946. 2.
財団法人日本軟式野球連盟	"	" 21. 8. 26	
日本相撲連盟	" 21. 10. 19	" 21. 1. 1	
社団法人日本馬術連盟	" 23. 5. 5	" 23. 5. 5	1951. 11. 15
日本柔道連盟	" 24. 10. 26	" 24. 5. 5	1952. 8. 30
日本ソフトボール協会	" 24. 11. 24	" 24. 3. 31	1951. 10. 15
日本フェンシング協会	" 24. 12. 26	" 21. 8. 1	1951. 4. 6
日本バドミントン協会	" 24. 12. 21	" 21. 8. 7	1952. 3.
財団法人日本弓道連盟	" 25. 8. 2	" 24. 6. 22	
日本クレー射撃協会	" 33. 2. 6	" 28. 1. 30	1951. 2. 14
日本ライフル射撃協会	"	" 33. 1. 30	1958. 1. 1
日本スポーツ芸術協会	" 29. 6. 17	" 29. 4. 13	
全日本剣道連盟	"	" 29. 10. 14	
日本近代五種競技連合	" 30. 12. 26	" 30. 2. 22	1955. 10. 27
財団法人日本ラグビーフットボール協会	" 31. 6. 19	" 2. 4. 23	
日本山岳協会	" 35. 4. 1	" 35. 4. 2	

表 5 その他の全国的な団体

団 体 の 名 称		
① 総合 団体	財団法人日本体育協会	全日本実業団体育連盟
	全日本高等学校体育連盟	日本志道会
	全日本中学校体育連盟	財団法人日本レクリエーション協会
	日本女子体育指導者連盟	
② その 他の 団体	オリンピック組織委員会	全日本高等学校野球連盟
	日本学生陸上競技連盟	日本産業野球連合会
	日本アメリカンフットボール協会	財団法人日本海洋会
	財団法人日本航空協会	財団法人日本弓道会
	財団法人日本学生航空連盟	財団法人講道館
	学生航空連盟	日本サイクリング協会
	日本グライダー競技連盟	全日本学生ワンダーフォーゲル連盟
	財団法人日本空手協会	全日本剣道連盟
	全日本なぎなた連盟	日本フォークダンス連盟
	日本社会人野球協会	全国職場体育主管者会議
	財団法人日本学生野球協会	全国体育指導委員協議会
	全日本大学野球連盟	

一方、一般社会については最近の趨勢から国家でもまた日本体育協会でも、とくに社会体育として具体的に計画、実施の方向にある。もちろん地方自治体の協力は必要不可欠であるが、それ以前に社会的背景は直接に多くの影響を与えている。

明治時代のスポーツは主として学生、生徒のあいだで行なわれていたので、学校方面の協力を求めて明治44年始めて組織として誕生したのが大日本体育協会であって、今日では大衆スポーツの基盤により、その種目団体数は34に及び、それらの傘下には各県ごとに極めて多くの団体を擁している(表4)。その他全国総合団体として30有余あり(表5)、増加の一途をたどっていると同時に、その内容は社会体育としての性格が強くみられる。

また学生の一般スポーツ愛好者との関連も深くなってきていることは、将来の日本の政治的展望と合わせて考えるべきである。

3. 考 察

これらの歴史と現実をみると、始めに一般的にスポーツ集団の発生機転について考えてみよう。

世にしばしば用いられる言葉で同好の士が相集まると言われているが、試みにスポーツ集団の部員に関する性格調査の成績からしても、主として循環気質が多く明朗性や社会性を認めることが出来るが、また神経質的傾向がかなり目立っているという特質もある。もちろん性格の

問題であるから一律的なものではなく偏差もあり細部にはいくつかの特徴を持つものであっておそらく好みに応じてスポーツ種目を選択しその目標に向かって方向づけられ相集まっていくつかの集団が形成されるのであろう。この目標は具体的には個人によりそれぞれ異なるはずであるが、より高度な技術的修得であり、またそれが動機となる場合が多い。

しかしその集団が長く続くためには平等条件のもとで部員が相互に交際すればするほど、その人々の価値と規範をますます共有するようになり相互に類似してくる。要するにこの自由に形成された集団は共有された価値と共有された接触に基づくものである。従って外見上は高度技術によって動機づけられ内部では相互的価値がこれを支えているのである。

この相互的価値は性格上同質のものが多く、異質のものは相互的価値を感じないために脱落する。

人と人の相互作用は好意の感情を生むものであり、それは新しい活動で表現される。その活動がまた次の相互作用をもつものであり、それが頻繁であればあるほど相互作用は強化される。

このような集団の発生機転は古くからあることであり現在もまたそうである。そして現在は長い伝統を持った価値と規範を強く共有する集団と新しい自由な集団が混在しているが、それらの発生機転はおそらく同じであろう。

しかし、現在の断面でこれらを比較するとき前者は高度の技術をもつ外殻とその中核は強固な主体的人間集団であり、後者は比較的に低度な技術またはかたよった技術をもつ外殻とその中核はいわゆる自由性の人間集団である。

いずれにしても技術外殻を経ることなしには中核である人間集団には入り得ないのである。

自由を求めて中核を直接に求める場合、すなわち人間が個性的になればなるほど自分がどういふ存在であるかを知ることが難しくなる。自我そのものにまとまりをつける人間の能力がきづまってくる。これが現代の大衆スポーツのたどる運命であろう。従ってこの大衆スポーツの主体性が与えられることが一つの目標となろう。

極端に個性的となれば集団は下位小集団としていくつかの型が出来るであろうが、所詮これらの一体化は基本的に困難であり、共通に言えることは個性を生かすことであるならば、極めて多くの集団が発生することは至当である。

一般的に価値観や生活様式の点で急速に細分化している社会は、かつての一体化された社会機構に対して疑いを持ち、もう一度構成しなおすためにはまったく新しい基礎をもつべきだとしている。そしてそのために多くの焦躁にわずらわされるが、われわれはまだこの基礎を見出してはいない。それよりももっと難しい個人の一体化という問題にぶつかることになる。それは環境としての生活様式が複雑細分化すれば自我そのものにまとまりをつけることがむずかし

くなる。

もともと主体性は生機的に社会的相互作用から出発する機能であるから、自我のあり方には数多くの可能性があるが、その多様性と選択性と自由とを求めてただ徘徊することだけで個人の一体化には容易に到達し得ない状態にある。すなわち過剰選択が引き起こす問題が激しくなってくると、主体性を探し求めるのは大衆に選択性が乏しいからではなく選択の機会が多すぎて、しかも複雑であるからである。逆に日本の戦時中の組織をみるに、その渦中にあるものは社会的に自我の確立に多くの時間を費して耽けることなくみずから主体性の決定に強いられ結果的にはむしろ大衆はこれに適応してゆくのである。社会が新しい文化のレベルに達すると、必ず個性化の傾向に対して新しい機会をもたらす、ますます多種多様になる人間の型を多く容易に抱擁する方向に向かってゆく。これは歴史的に一つの自我を問題としているのではなく連続した自我の変化様相である。しかしこの環境の変化に適応出来るものは基本的にはイドと基本的性格がこれを解決する主体性のよりどころであろう。自由な個性的集団の中で主体を求める困難さに遭遇して自らを発見する過程がいわゆるクラブ組織の教育的目標となる。

もちろんこれらの変動期にある青年は混成的な自己を形づくっている種々さまざまな自己であり、これらの自己相互の間には変遷が恒常的に見られるから当然集団自身も変化しても不思議ではない。そしてそれを認めて見まもらなければならない。しかし現時点ではこの集団は自発的集団でなければならぬと同時に、その集団の価値判断により目標転位を許さなければならない。要するに現在の断面は歴史をもった集団と新しい自由集団との混在的状态であるが、この新しい集団も時間の推移とともに歴史をもち、同時に自由の中から伝統を持つようになるであろう。

4. 結 語

1) 学内における歴史と伝統をもつスポーツ集団と、数多くのいわゆるクラブ集団、更に社会における高度なオリンピック等を対象とする集団と大衆スポーツの二重構造について社会的背景を考えざるを得ないが、現実がそうなのであるから、そこに多くの矛盾があってもその実態を認めなければならない。

2) 既存の集団に新たに加わろうとする部員が多ければ、そのような新入部員の参加に対して集団の抵抗が大きくなる。新入部員が少なければ強化するという意味で歓迎されるが、多ければ既存の集団の内部に分裂が起きる原因となる。一集団が膨化するときはそこにある統制という組織が成立するのは必然であり、そこに規範が強ければ強いほど、また接触頻度が高ければ高いほどその相互影響は強くなり、新しい方向に進む核心が発生するが、一方これから脱落

する部員も出てくるはずである。

従って集団の膨化は統制と脱落がおこるから、むしろスポーツ集団の本質を考えると自然発生的に存立するほうが質的に合理的であり安定性がある。

3) 一集団が二分し、また二集団が一体化することもあるはずであるが、それは自由であって部員の個性に主体を置くときは組織による統制にこだわる必要はなくなる。社会が複雑で異質的であればあるほど団体数は多くなるのが当然である。そしてそれぞれの団体にそれぞれの目標と価値の設定があり個性的集団として存在する。

4) 一般的には自発集団がひとたび集結されると、そこに歴史と伝統が発生し部員が増大するにつれて構造はさらに小さな異なった機能をもつ下位集団へと分裂し、少なくとも部分的には当初の目標からそれようとする傾向をもつ場合もある。しかしこの目標転位は主として手段としての技術的外殻の場合が多く、もし伝統が強ければこれに適応しようとする動きも出る場合があるが、それはこの集団の伝統的価値によるものであろう。

5) 部員の自我並びに主体性は恒常的なものではなく時間の推移とともに変化するものであるから、集団はその部員の基本的イドとそして遺伝的性格の相引的基盤のもとで一定の歴史が存在すれば多種類の自我を含むことも理論的には可能であろう。

従って現在はこの歴史を持つ集団と新しい集団の混在時期であるが、時代の進展によりこの新しい集団もまた歴史と伝統を形成する運命にあるから、将来は同質のスポーツ集団が数多く同時に存在することになるであろう。

6) 新しい集団も基本的には同質の自然発生集団であるからその将来像を考えると意識的にこれを積極的に援助する必要はあるが、その指導に深く立ち入ることは基本的に矛盾があるであろう。

〔文 献〕

辰沼広吉：新制大学における体育の価値、慶應義塾大学、体育研究所紀要、第7巻第1号、p. 1、昭和40年。